

様式第4号（第5条第2項関係）

本文4,965文字／5,000文字

令和6年10月28日

所信表明書

被推薦者 氏名（自署） 小笠原 司

私、小笠原司はこのたび学長候補者として推薦をいただきました。学長候補として、私の抱負を述べます。

1 富山県立大学の現状と私が求める大学の姿

富山県立大学（以下「本学」という。）は、平成2年4月に日本海側初めての工学系公立大学として開学し、大学院の設置、工学部の学科拡充、看護学部の新設、中央棟やDX教育研究センターの整備を進め、近年では令和5年4月に大学院看護研究科の設置、本年4月に情報工学部の設置により3学部9学科の体制となりました。

また、令和7年4月に大学院看護学研究科専攻博士後期課程の開講に向け、更には、令和8年4月の情報工学系大学院（博士前期課程・後期課程）の設置に向けて準備が進められているところです。

開学以来、現在に至るまで、特色ある教育、研究、地域連携等を積極的に推進し、多くの有為な学生の輩出により、経済、産業及び医療の振興に大きな役割を果たしてきました。

現在、少子化の進行により、大学間競争が激化する中でも、本学は、県民や地域、産業界・保健医療界の期待に応え、専門教育、研究力、地域連携活動を充実・強化し、地方創生、地域共創の一翼を担い、地域課題の解決等に貢献する大学づくりを継続して推進していくことが求められています。

私が求める本学の姿は、一言で言えば、優れた人材を育成する教育体制の拡充をめざす大学です。

そのためには、令和9年3月末までを目標期間とする本学第2期中期目標及び中期計画を全ての教職員が共有・共通理解の上、その実現に向けて相互に協力して積極的に取り組むこと、県立の大学であってもグローバル化、グローバル教育とは無縁でなく率先して取り組むこと、教育の質保証を通じて、学生の満足度等の向上に取り組んでいくことが重要と考えています。

2 第2期中期目標・中期計画から第3期中期目標・中期計画にかけて学長の使命と取り組むべき重点事項

本学は、平成27年（2015年）に公立大学法人に移行して、本年で10年目です。この間、工学部の学科拡充、看護学部の開設、大学院工学研究科専攻の再編、DX教育研究センターの開設、大学院看護学研究科の設置、情報学部の設置などに取り組んできました。また、入学定員も平成27年の230名から令和6年（2024年）には515名と2倍強に増加しました。

さらに、前述のとおり大学院の整備・充実が進められているところであり、

同時期には情報工学部棟が供用開始となります。極めて短期間の間に、大学内のハード・ソフトの環境が大きく変化します。

こうした中にあって、学長の使命は、以下に示すとおりと考えており、全教職員の協力を得ながら、教育者、研究者そして大学理事・副学長として培った知見や経験等を基に、全力で取り組んでまいります。

【教育について】

(1) 3学部9学科体制の運営機構の着実な実施

本学は、県民や産業界、保健医療界からの期待に応えるよう、医薬品工学科の新設や知能ロボット工学科の設置、看護学部の開設、電気電子工学科と情報システム工学科の新設・拡充に取り組んできました。また、デジタルの力で日本・世界の社会変革ができる人材の育成を図るため、工学部の学科を再編し、本年4月には情報工学部を開設しました。

県民や産業界等の期待に応えるには、まずは現行の3学部9学科体制による組織の運営と人材教育を着実に実施してまいります。

(2) 最先端への挑戦

科学技術の潮流が大きく変動する中で、本学の使命である県内産業、保健及び医療の発展、県民の期待に応え、更には、学術の向上に寄与に貢献するには、本学は、常に基盤的・先端的な研究を推進し、最先端に挑み続ける必要があります。また、教科を超えた「教養」も不可欠です。

さらに、現在の学科のカリキュラムも科学技術の潮流の変動に合わせて見直し、再編を行うことも必要と考えており、不斷に最先端に挑み続ける学内環境の整備に努めてまいります。

(3) キャリア教育の充実とライフキャリアの支援

本学の就職率は、毎年ほぼ100%という実績があります。その範囲は、大学で学んだ専門知識や技術を生かし、自分の個性や能力がフルに發揮できる全国各地の電子、電気、情報関連、機械、鉄鋼、建設、薬品関連企業などに広がっています。看護学部についても、学生が看護師国家試験を経て県内医療機関等へ就職しています。

一方、人生全体を俯瞰し、その中で「自立した個人としての自分らしい生き方（ライフキャリア）」を応援するキャリア教育が重視されてきています。本学の卒業生が、就職のみならず生涯にわたり着実にライフキャリアができるよう、キャリア教育の充実、支援に努めてまいります。

(4) 大学院教育の充実

本学の3～4割が大学院に進学しており、その進学先も全国の名だたる大学院に進学しています。

本学の大学院の充実が進む中で、博士前期課程・後期課程の入学定員の充足率の維持向上に努めてまいります。

また、県内企業、自治体等で働く社会人、公務員のリスキリング教育に応えるために社会人入学に取り組むとともに、大学院教育の在り方の検討を行ってまいります。

(5) グローバル教育、国際交流の推進

県立の大学であってもグローバル化、グローバル教育は無縁ではなく、必要不可欠なものです。国際化に対応した人材の育成や、英語で発信され

ている最先端の知見を学ぶため、英語を中心とした外国語教育に力を入れるとともに、留学や語学研修、大学院生の国際会議等への参加といったキャリア支援ができるよう努めます。

また、学術交流、学生交流協定を締結している海外大学院、研究機関と提携テーマの充実や促進等を進めてまいります。

(6) 既成概念にとらわれない発想を

私は、2021年に教授職を退任しましたが、改めて人材を育てる教育の重要性を感じています。学生に対しては、やりたいと思ったテーマは突き詰める既成概念にとらわれない挑戦的な発想を大事にしてほしいと思います。そのためのサポートを惜しまない大学づくりに努めてまいります。

【研究について】

(1) 競争的研究費の確保

本学が教育研究を確実に実施していくには、運営費交付金は大きな要素を占めています。

一方で、競争的研究費の獲得は必要なことであり、特に、科学研究費補助金については、教員の実績活動の評価に反映されることから、科学研究費補助金の新規採択の向上等に努めてまいります。

また、省庁等の競争的研究費の獲得についても支援してまいります。

(2) 意欲的な研究者への支援

学長裁量経費などについては、例えば戦略名やメッセージ性を持たせて、それに沿った意欲的な研究の支援を通じて若手研究者の育成等に努めてまいります。

(3) 研究成果の発信及び保護

研究成果については、県民、企業等にさらに認知されるよう、公開講座、国内外のセミナー、研究会などを通じて積極的に発信してまいります。

研究成果発信のためのオープンサイエンス促進に向けて取り組むとともに、研究成果の取扱いや保護についても努めてまいります。

【社会貢献について】

(1) 地域連携の推進

これまでの地域連携活動の経験から、自治体、金融機関、企業などは、それぞれ課題を抱えていて、現状を変えようとする意識が強く感じられます。県内には、高齢化率が全国平均を上回る自治体があります。自治体と本学が連携し、生活や健康などのライフサイエンス、持続的な地域交通や社会インフラの維持管理など、少子高齢化社会の課題解決のプランを構築し実装化することができれば、富山県から全国に発信できる可能性があります。

このため、産官学連携による共同研究や交流活動の推進、県立大学研究協力会との連携が充実する取り組みを進めてまいります。また、本学の地域連携センターやコーディネーターによる技術相談や学部横断的な取組を進めるとともに、本学が有する研究シーズと企業ニーズのマッチングも促進してまいります。

(2) 地方創生・地域共創の推進

富山大学をはじめとする県内大学、県や市町村、経済団体等との連携を

一層促進し、産学連携に対する研究者の意識を高めるとともに、COC事業や大学コンソーシアム事業を活用し、地方創生・地域共創などの活動の充実に努めてまいります。

【大学運営について】

(1) 魅力あるキャンパス整備

本学は、工学部及び情報工学部は射水キャンパスに、看護学部は富山キャンパスにあります。各キャンパス内にある建物、設備、実験、検査機器等は建設、整備された年度は、それぞれ異なります。各建物、設備等には、それぞれ耐用年数があり、経年劣化は不可避です。

今後とも本学が魅力ある大学となるよう、計画的に建物、設備の改修等や実験、検査機器等の更新に努めてまいります。

(2) 少子化への対応

少子化の進展による今後の18歳人口の減少を見据え、大学生、院生の確保、教育の充実は大きな課題と考えています。本学なりの学生確保の道筋を作らなければならないと考えており、その整備に努めてまいります。また、本年3月の北陸新幹線敦賀駅の延伸は、中京東海圏や関西圏から本学へのアクセス条件に大きな変化をもたらしていることから、入学希望者にとって教育・研究面で魅力ある大学であることをアピールしてまいります。

(3) 知名度・満足度の向上

これまでの実績などから本学への期待や求められる役割は、益々大きくなると思っています。

大学教育・研究に携わる者にとって学部編成や教育・研究設備など、優れたポテンシャルを有した大学と言えます。

しかしながら、その知名度は、県内高校長にも十分浸透していないとお聞きします。本学の知名度を上げることは、今後、少子化が進展する中でも入学希望者の人数を維持していく上でも必要なことです。特に女子高校生、女子中学生に工学部、情報工学部の魅力を認知してもらい、進学先に選んでいただくことは、本学の在り方にとっても重要なことと思っています。

さらに、学生・院生の満足度を上げることは、本学の知名度の向上にもつながることから、それぞれの向上に努めています。

(4) 必要な教職員の確保とワークインライフの推進

富山県の知の拠点である大学として、引き続き優秀な教員の積極的な採用を計画的に進めます。また、大学の課題を教員と共有し協働する事務局職員、専門職員の採用も教員と同様に計画的に進めます。

さらに、全教職員のワークインライフが実現できるよう、働きやすい職場環境の整備に努めます。また、大学研究者としての弾力的な働き方を推進します。

(5) 大学のDXの推進

大学の事務作業の増加は教職員に大きな負荷となっています。この軽減のためには、デジタルトランスフォーメーションに取り組まなければなりません。私たちは、新型コロナウィルスを経験し、また、本年1月1日には想定もしなかった能登半島地震も発生しました。そうした中にあ

っても、授業や研究が滞ることがない教育研究等のデジタル化も進めたいと考えています。現場からの提案を重視し、よりよい導入システムの整備に努めます。

(6) データを活用した富山県立大学の運営・経営

IR を活用して、大学の研究の特色や強みを網羅的に調査・分析することが主流となっています。さらに分析結果に基づいた研究戦略企画の立案、学生のニーズ把握、カリキュラム編成など、大学運営・経営の基本的事項でもあります。

IR オフィス長として培った知見と経験などを基に、大学内にある情報を収集・整理し、可視化し、「データでみる富山県立大学（仮称）」といった形で公表することにより、研究の特色、強み、学生満足度などの数値化、グラフ化を通じて認知度の向上にも努めます。

(7) 第3期中期計画の策定に向けて

令和9年3月31日までを期限とする本学第2期中期計画は、計画どおり進むものと思っています。

しかし、令和9年3月までの期間は、第2期中期計画の実行と第3期中期計画を策定するための単なる準備期間として捉えるのではなく、第3期中期計画終了年度、さらにはその先の、本学が目指すべき姿、確かな方向性を考える重要な時期であると認識しています。

その重要な時期を実りあるものとするため、皆さんの協力を得ながら、第3期中期計画の策定に向けた意見交換、検討を行ってまいります。

以上の取組を全教職員のご理解とご協力のもとに積極的に進めることにより、本学が一層魅力ある大学に発展していくものと確信しています。

A4横書き、フォントサイズは12ポイントで、大学運営の基本的方向、学長としての姿勢等（教育、研究、社会貢献、大学運営等）について記述してください。
概ね5000字以内で作成して下さい。